
日本英語の所在

正 田 三 良

パソコン通信を始めて半年を過ぎた。動機はさまざまだが、日本人が書く英語の実態を知りたいというのもその一つだった。会員数1万を超えるネットワークには英語のボードがあるし、各地にあるアメリカ人を主とするローカルネットでも、日本人がメッセージを書いている。時には白熱の議論が交わされることもあって、つい最近私が提起した「環境破壊と科学」というテーマをめぐる日本人、アメリカ人が入り交じって激しく応酬し、私の敗北に終わったところだ。それはそれとして、そこに見る日本人の英語を何に役立てようとするのかと言えば、日本人式英語への道を探る資料にしたいのだ。

日本人は日本式英語でよいという主張は、かなり昔からあったようだ。Japlishをはじめとして、それは、Japalish、Janglish などさまざまに命名されている。私自身も若い頃からこの種の主張を

してきたし、最近では教室でも盛んに口にするようになっている。観念的には、それが正しいと私には思える。だが、ひと度具体的な姿をイメージしようとする、その一部さえも見えてきはしない。確かに pidgin English その他各地の非英米英語の存在を指摘して日本英語があり得ると主張するのは正しい。だが、事はそれほど簡単ではない。きわめて重大な違いがあるからだ。例えば pidgin は実際に使われる中から自然に育ってきたものだ。日本にはその現実の英語使用状況、少なくとも最近まではなかったのだ。日本英語は「できる」のではなく、「つくる」ものとしてしか存在しないわけだ。そこではエスペラントの創造に似た人工的加工の側面が濃厚にならざるを得ない。英語を使用する必要性が全国的に、しかもかなり日常的に生まれることが当面ないとすれば、どうしてもそうなる。

しかし、日本英語の誕生が望ましいことは疑いないだろう。私は、20年余の英語教育経験で、英語が使える日本人をいったい何人生み出ただろうか。同じことをこのまま続けてよいのか。教授法の適不適もあるだろう。教育条件の如何も問題だろう。だが、それらにいくらの進歩があったとしても、飛躍的に事態が改善されるとは思えない。問題はむしろ、英米の教育ある人々の英語を金科玉条として、それに一步でも近づくことを理想としてきた点にあるのではないか。これでは、天才

以外に満点は望めない。到達不能の目標を掲げていては、挫折感、劣等感を煽るだけに終わる。だからといって、モデルのレベルを下げようというのではない。モデルの種類を変えるのだ。それは日本人にとって学び易く、国際的に通用可能な英語だ。それを日本英語と呼ぶとして、そのモデルは現実には日本人が使っている英語にしかない。その英語がどのようなものか現場で観察することからしか事は始まらない。手近な現場の一つがパソコン通信と考えたのだった。
